「ふつう」とは？　どうしてかな？

それは子ども理解の第一歩

島根県教育センター教育相談スタッフ
特別支援教育セクション

教育センターでは、この秋、「特別支援教育専門講座」と「すべての教職員に役立つ！支援につながる子どもの理解講座」の２つの人気講座を開催しました。どちらも講師の先生からたくさんの学びをいただきました。その様子をお知らせします。

「インクルーシブ教育に向けて今できること ―通常学級の教育を考える―」

ノートルダム清心女子大学人間生活学部児童学科准教授
インクルーシブ教育研究センター長　　青山新吾先生

通常の学級でインクルーシブ教育を進めていくために必要なことについて詳しくお話していただきましたが、その一つとして挙げられたのが**『やさしいどうして！？』**の考えです。多様な子どもたちを理解するためには、日常の子どもたちの言動の背景要因に「どうして？」と目を向けていくことが欠かせません。青山先生は『やさしいどうして？』とは“どうしてかなあ？”と子どもと一緒に考えるスタンスであると述べられました。私たち自身はどんな「どうして？」のまなざしをどのように子どもたちにむけていけるのか、改めて見つめなおす視点をいただきました。

また、**マジョリティとマイノリティ**の話も印象的でした。「学級はマジョリティ（多数派）の意見に偏っていないだろうか。マイノリティ側（少数派）の困難や気持ちに寄り添うことができるかどうかが重要である」とおっしゃいました。学校という場所では、「ふつうはそう」とか「多数がそうだから」とか「前例がそう」という理由で物事が動いていることがよくあるのではないでしょうか。でも、そうではない考えや事情の場合も少なからずあります。そのマイノリティの立場が自分を抑えたり我慢したりすることがないように考えていかなければならないと感じました。

絵：センターによる解釈

受講者のアンケートより

- 丁寧な対話と多様な視点についての大切さを再認識した。
- 自分に余裕がなくなると、「怖いどうして!?」「圧のあるどうして!?」を発動しがちになる。「やさしいどうして!?」が当たり前になるようにしたい。
- 何となく、人と同じようにとかみんなと揃えてとか考えがちだが、揃わなくても良いと教員側が思えば、楽になる生徒がいるだろうなと思った。

「特別な教育的支援を必要とする 子どもの理解と支援」

宮城学院女子大学教育学部教育学科教授　　梅田真理先生

発達障がいについての知識、具体的な支援方法、子どもを支援するための校内体制、そして保護者との連携についてのお話をいただきました。「ふつうとは何？」という問いかけから始まった講義でした。子どもたちは多様な存在であるため、「ふつうの」ということはなく、障がいの有無にかかわらず、**「子ども一人一人に合わせた目標」**をもち、**その目標を基に授業を考える**ことが大切だとおっしゃいました。

また、特別視しすぎる支援は子どもの疎外感や孤立感を増してしまうこともあり、学級集団における支援は**個と集団の支援のバランス**が大事であるという内容が印象的でした。梅田先生にはそのためにどうすればいいのか、事例を交えてお話しいただき、受講者のみなさんからもすぐに実践できると大好評でした。

受講者のアンケートより

- 障がいのある児童もない児童も安心して学ぶことができる場の設定が必要だということがわかり、少しずつでも学級で実践できるようにしていきたいと思った。
- ライフステージを意識して、今目の前の子どもたちにはどんなスキルが必要か整理し、根気強く指導を続けたい。

新任教職員研修第Ⅳ回教育センター研修の「特別支援教育」の講義の中でも、「特別支援教育はもはや特別なものではない」とお話をさせていただきました。特別な教育的ニーズのある子どもたちだけに支援や援助を行うのではなく、すべての子どもたちの笑顔のためにできることは何か考えていきたいですね。